

教行信證の成立問題

石 田 充 之

一 問題の取上げ方

教行信證の成立問題は近時東京大學結城教授の本誌初號への「信卷」別撰説提唱を契機として大江・花山諸教授（本誌一ノ二號等）等の反駁があり、頼みにその究明の度を深められていつた観があるが、いずれにせよ、それが最初に「教行信證」の製作年時間題（元仁元年説か歸洛後製作説か等）と後世の眞宗宗學者の内容理解の問題（能行派所行派に分れること等）に拘つて提示されてきたように、この課題が、現存「教行信證」の最も基本的な素材と思惟される坂東本「教行信證」等による、一面書誌學的な追求と、他面その思想内容構成の探求とに拘る兩面よりその究明を深められてゆかねばならぬ問題なることは云うまでもないことであろう。その意味で、最近の龍谷大學小川教授の本誌（二卷二號）への書誌學的な研究發表は可なり實證的に、この課題理解の度をより深められていつたものと、本論究への寄與多きを思わすものであるが、今は稍々視野を展開して、法然親鸞の關係、法然門下全體との關係、親鸞の著書全體についての考察といった全

體的な視野より今一度この問題を廣い範圍に於て追求してみようと思ふのである。勿論、そのような企圖は「教行信證」の思想内容面の理解に當つても、——それが、その後覺如、蓮如と傳承された理解を受けて、徳川時代に至り、能行派の見解、所行派の見解等とその所見を異にしてきておること、然も、それ等の見解は可なり非歴史的であること等をも批判的に顧慮し、——「教行信證」を今一度、より歴史的な、より客觀的な場所に位置せしめて考察してみようと意圖する試みに外ならないのである。それは、「教行信證」の内容をも、能行派的にみるべきか所行派的に理解すべきかと云つた如きこと以前のより原始的な、然もそのような意味よりする、より客觀的であると思惟される場に位置せしめて理解し、以て、書誌學的な客觀的な探索と相俟つてその成立問題を考へてみようと思圖するのである。然し、以下の敘述は極めて試論的なものであり、然も思想内容展開の一面を主とするものなることを斷つておき度い。

二 書誌學的解明への顧慮

我々が現在見得る「教行信證」否少くともその草稿本とも稱せられる坂東本「教行信證」の構成は如何なる過程を以て形成されてきたのであろうか。この課題については、幸いに、現在坂東本は、何回にも亘つて寫されたものかと思われる諸經論釋文の類聚（集）の跡を示し、然も何回もの補筆淨書の跡があつたことを推測せしめ、本文中にも一枚ばかりではあるが（行卷他力釋下）別筆の混在を注意せしむるのであつて、然もなお、現存坂東本に比較的近い内容の寫本とも見做される西本願寺文永古寫本や、その他、それ（現型の坂本・西本）以前の形態を多少とも傳えるかと推測される寛元五年（1247）尊蓮書寫の奥書をもつ存覺延書本、文明古寫本、大谷大學藏室町中期古寫本の存するあり、又高田專修寺古寫本、常樂臺存覺筆寫本の現存するあつて、この成立過程の問題についての書誌學的な研究の参加を期待される分野はかなり廣いのである。かような意味で、現存坂東草稿本を通じての執筆形式、文字、紙質、調卷等についての忠實な最近の書誌學的な研究の指示は可なりその成立過程の解明に示唆する點が多い。従つて、今は以下の敘述にもこれ等の成果を參考にしたいと考えるのである。

然しながら、このような書誌學的な研究の、成立問題への

寄與は、現存坂東本、その他上述の諸本に具體的に殘されてある限りの素材を通じての科學的實證的な究明の寄與であつて、現存素材形成以前に拘つての成立問題考察への寄與の度合は可なり弱められてくる。又それは内面的な思想構成面の展開傾向、その形成の環境一般についての考慮等をも十分顧みなくては書誌學的な實證の十分にして且つ正しい成果を期待し難いと思う。

そのような意味よりして、今の場合は特にその成立問題を、上述のように、法然親鸞の關係、法然門下一般の環境、親鸞の著作への全體的な俯瞰等の場より廣範圍に取扱ひ、然も特に思想展開の傾向に特に注目することに於て考へてみたのである。

1 山口縣の拙寺明嚴寺藏の古寫本で正信偈文に「見敬得大慶喜人」とあり、「行卷」や「化卷」最後の尾題に「顯淨土眞實教行證文類」とある如き坂東本訂正以前の形態を示す。

三 課題究明の出發根據

右のような考方よりして——そこには勿論本誌二卷二號の小川教授の坂東本についての書誌學的な交渉の成果の如きも考慮の中に入つてくるのではあるが——、先ず第一に本問題究明への最初の出發據點を得る意味に於て、現行の成立せしめられてゐる坂東本の敘述形式思想構成の内容が基本的には

如何様に構成されているかを——それはかの結城教授等の主張（本誌一卷一號、二卷一號参照）の如く「信卷」別撰と考えるべきかどうか等の問題を考慮しつゝ——注意してみると、

「行」「信」兩卷の内容が、「化卷」の觀經十九願の行信、小經二十願の行信に應對せしめられる大經十八願の行信として示されていることは云うまでもないこととして、特にそこに於て、「信卷」の三一問答釋と「化卷」の大・觀・小三經三心一心一異問答釋とが恒に密接不離の關係に置かれていることに注目せしめられるのである。従つてそれ等「信」についての思想内容の構成は、敘述の形式は暫く差置いても、その内容の成立は大體恒に相前後して形成され、餘り時を隔てない否寧ろ同時的であると見ることが穩當であらうかとも理解せしめられることを先ず注意したのである。

乃ち、その敘述の形式より見た場合、一面、かの結城教授の主張の如く（本誌二卷一號）、「行卷」にも、その最初に「有大行有大信」と明す如きを始めとして、六字釋下、列祖引釋の結文、兩重因緣釋下、行一念釋下、一乘海釋下の二教對・二機對・偈前・正信念佛偈と、全篇行を明すと共に信にも言及することを否定し得ないのであつて、然も、そこに明かされる選擇本願即ち第十八願の行信は「化卷」に明される第十九願の行信、第二十願の行信に、「信卷」を除外して、直接應對せしめられていると云う邊の意味を一應顧慮せしめられ

ざるを得ないのであるが、それにしても、他面、「信卷」に特に第十八願文を中心にその願名を詳に擧げ、善導の觀經疏三心釋文等を詳引し、字訓釋、法義釋等を以つて三心一心問答を展開し、機無・圓成・廻施の三心即一心・信樂・信心義を明にされる邊の所見は、「行卷」に明される信内容を具體的に解明すると共に、「化卷」に第十九・二十願文を中心にその願名を詳にし、善導の觀經疏三心釋文等に注目しつゝ觀小二經の三心一心と大經第十八願の三心との一異問答を中心に要（十九願觀經顯說）・眞（二十願小經顯說）二門の行信義を詳論されることが、如何に密接な關係におかれているかに注目せしめられざるを得ないのである。「化卷」の問答下に、異なるが自利各別の三心、定散の雜心なることを明しつゝ、同なる邊につき「利地通入の一心」、「金剛眞心」、「釋迦善逝、宣說至心信樂之願心・報土眞因信樂爲正故也、是以大經言三心樂、如來誓願疑蓋無雜故言信也」、「眞心即是大信心、大信心希有最勝眞妙清淨、何以故、大信心海甚以難入從佛力發起故」等と示される如き所見は「信卷」の三一問答釋等の所見を豫想せざるを得ないのである。従つて、現存坂東本等の成立形體につく限り、敘述形式よりも「信卷」を全く除外しての「行卷」のみの「化卷」への直接的應對論には稍々無理があるのでなからうか。若し現形「行卷」のみに應對する「化卷」を豫想し得るとすれば、今少し「化卷」

は簡素で原始的であるべきでなかろうかと思われる。又「信卷」の「若行若信」等も、「證卷」の所見が「眞宗教行信證」を承けての「若因若果」である場合、矢張智暹の理解の如く「行」「信」兩卷に亘つての「若行若信」と見るが穩當でなかろうか。その詳細なる立證は今具述するに遑がないが、いずれにせよ、かようにして、その「信卷」の三一問答の内容は「行卷」に明かされる所と密接に結ばれ兩者相待つて、「化卷」所明の十九二十願、觀小二經の行信の内容と應對せしめられ、そこに自ら信の眞假批判（信、化兩卷に亘る三經の三心一心一異問答）を所論の極點として、「行卷」に明かされる眞實行の意義を解明されようとする意圖が窺われることを注意したいのである。その邊、小川教授の如き書誌學的な反論（本誌二卷二號）を暫く差置くも、結城教授の「行卷」にも信の解明があつて、現行の「教行信證」の「行卷」の内容のみにて「化卷」の行信への應對は大體可能で、現行の「教行信證」の「信卷」全體は別撰であるとされる説（本誌一卷一號、二卷一號參照）には俄に同意しがたいと思う。然も、現存坂東本の敘述形式についての書誌學的な究明に顧みる場合、益々その邊の確信を深めさせざるを得ないのである。然しながら、今の場合は勿論、下に記するように、坂東本の「信卷」の現形の全部がその執筆の最初期よりあらしめられたとは考えないので、その三一問答部を中心とする如き素朴な

原始形が少くとも最初期には「化卷」の問答部の素朴な原始形に即應して存在せしめられ、それが漸次擴充されて所謂現形の「信卷」なるものを形成していつたかと推測する意味に於て、一應「信卷」全體別撰説に同意しがたいのである。従つて、結城教授の「信卷」別撰説の考方には、教行信證の成立過程を廣範圍に課題とする今の場合——それは教授のそれとは可なり異つた信卷別撰の考方となるかと思うが——、一應領かされる點がないではないことを斷つておきたい。結城教授のそれとは異つた意味に於て、信卷別撰の如くにも見做される一面を示すに至つておる原因があることを考えたいものののである。

いづれにせよ、上の様な現行坂東本の内容の如きについての理解は、更に廣範圍には、その他の親鸞の著なる「淨土文類聚鈔」「愚禿鈔」等の内容にも注意の眼を運ばしめるのである。勿論親鸞のその外の小著法語にも注意を及ぼしめるのであるが、特に比較的に組織的に「教行信證」に關係深くても近い内容を以て、その見解を具體的に示す上述の兩著は今の場合注目せしめられるのであつて、「淨土文類聚鈔」の後半部の大經觀經小經三心一心一異問答、「愚禿鈔」下卷の善導觀經疏三心釋の理解は、兩著夫々の前半部、上卷の見解に相應じて、現行坂東本「教行信證」の上述の如き「信」「化」兩卷に亘る大・觀・小三經の三心一心一異問答との關連深き

を了解せしめられるのである。即ち、「淨土文類聚鈔」がその前半部に於て教行信證中心に教行信證の四法を明し、次に念佛正信偈をおき、後半部に大・觀・小三經の三心一心一異問答を展開して極めて「教行信證」に近い内容を以て形成されていることが兩著の内容の關係深いことを推測せしむることは今特に喋々するまでもないこととして、「愚禿鈔」の如き

についてみるも、その上巻に、二雙四重判、三經による選擇本願諸撰擇觀、三往生觀、佛土觀、本願一乘機教、二教對二機對觀、を表示し、玄義分無上心文・淨土論一心文・大經付屬文・元照小經疏文を引證する如き所見、そこには教（二雙判・三經）・行（選擇本願一乘機教・二教對二行、二機對二信、小經疏文二行）・證（三往生觀・佛土觀）中心の信（一乘機眞實信心、二機對、引用經論釋文）を含む四法開顯の意が窺われ、それは下巻の善導觀經疏三心釋による、大・觀二經、要弘相對義中心の聖道・眞門等にも言及する信（行にも及ぶ）の眞假批判觀と相待つて、體系的には如何に「淨土文類聚鈔」や更に「教行信證」の所見と傾向的に關係深いかを意味深く理解せしめられ得るのである。然も特に「愚禿鈔」下巻の「觀經三心釋部分」、「文類聚鈔」後半部の大・觀・小三經の三心一心一異問答部分の見解が注意される場合、それ等が「教行信證」の「信」「化」兩卷相待つての信中心の所見と如何に緊密な同一傾向線上に位置せしめられているかに注目せしめられる

教行信證の成立問題（石 田）

であろう。それは同一人の著作なる故、當然のことではあるが、その邊、益々上述の如き「行」「信」兩卷相待つての「化卷」の行信に應待する三經の三心一心問答中心の論證の仕方が如何に親鸞の常に一貫した論證の態度であつたかに、想察の注意をむけしめられるのである。

かようにしてか、今、それ等兩著の構成内容が、現行坂東本の「教行信證」の構成内容と全體的に極めて關連性深きことを推測せしめられるのであるが、そのような觀點よりしてそれ等三著の思想内容敘述形式が比較檢討される場合、これ等諸著の既成の構造内容の相互比較檢討よりして、所謂現行の「教行信證」の成立過程を逆に推測せしめられる端緒據點を與えられるかとも考えさされることを注意しておきたいのである。勿論そこには、これ等諸著についての書誌學的な究明の可能な限りの參與を得なければならぬのであり、又完成された内容と完成されようとする形成過程の内容との考察に混同が起らぬように嚴密な注意を要するのであるが。これ等諸著の示す思想内容・敘述形式の本課題究明への示唆は少なからざるものがあると思惟されるのである。

1 岩田氏論文（高田學報三四號）参照。

2 拙著「日本淨土教の研究」結篇第一章第四節第二項、同第五節第一項等参照。

四 成立方向の考察

以上のような諸著の構成内容・論證の仕方を考慮しつつ、その最後の完成作品——比較的だが——たるを思わす現行坂東本「教行信證」の後序の所見等に顧みる場合、上述諸著に漲る三經の三心一心一異問答中心の論證即ち「信」中心の論證傾向全體が、師法然の主張の歸結である「選擇集」の第十八願念佛一行往生義——「行」——を明にしようとする意圖に終始していることを偲ばしめるのである。即ち法然主張の「教（三經一致所明の）行（十八願念佛一行）證（往生淨土）」の意義を、その「行」——善導の觀經疏三心釋の一心專念彌陀名號等を承けるものだが——に具する「信」内容（選擇集二行章・三心章参照）の闡明によつて解明しようとするものが親鸞の一貫した態度なることを推察せしめられるのである。法然の教行證三法義即ち念佛一行往生義を念佛に具する信（三心一心）内容の追究によつて解明し依つて以つて、教行信證四法義に歸結せしめられると云うのが、法然より親鸞への主流的展開傾向であり、選擇集より教行信證への中心的成立過程の道なることを推測せしめられるのである。

以上は勿論現在出來上つてゐる上述の如き親鸞の諸著の完成面の内容及び最近のそれ等に對する書誌學的な研究の成果の一端をも考慮して、法然より親鸞へ、「選擇集」より「教

行信證」への展開内容を逆推した結論に外ならないのであるが、更にかような展開傾向の方向は、當時の法然門下一般の諸傾向、特に親鸞の兄事した隆寛聖覺等の諸著に示される善導の「觀經疏」等による「信」中心追究の示唆する所等に顧みるならば、益々その裏付けを得ることと思う。

親鸞が「教行信證」を書き始めた頃かといわれる元仁元年（1224）より三年後の年が、丁度法然（1122）滅後十五年目なる嘉祿三年（1232）であつて、念佛者の領袖としての隆寛・幸西等が流罪追放になり、「選擇集」の初版の燒却・法然墓所の破棄、全國的な念佛の禁止といつたことが行われた所謂嘉祿の大法難の年であるが、この頃前後以前が法然直弟の著作活動の最もめざましい時代で、法然滅直後著された高辨の「摧邪輪」の發菩提心論を中心にする「選擇集」への佛教原理論的反論への反撃の意味もあつてか、健保六年（1238）の著なる幸西の「玄義分抄」の一心念佛の主唱の如きを始めとして、承久三年（1221）より嘉祿二年（1230）頃に亘つての著作なる淨土宗西山派祖證室の「觀經疏觀門義」等に表示される觀門開會三心領解念佛の主張の如きに至るまで、いずれも善導の「觀經疏」に直參して念佛の念即ち信念三心の内容の追究に於て稱名念佛の實踐的意義を明にし、よつて以て法然念佛義の徹底的な解明を意圖したことが注目されるのである。然も特に、親鸞が「よきひと」として尊敬した聖

覺の承久三年(1221)の著なる「唯信鈔」が「選擇集」を承けて善導の「觀經疏」三心釋によつて三心義を明にすることによつて念佛義を解明し、なお十七願・十八願の關係に注目する如き、隆寛の健保四年(1216)の著なる「具三心義」承久二年(1220)の著なる「極樂淨土宗義」等が相待つて、曇鸞の「往生論註」等の他力義によりつゝも、善導の疏に直參して、三心の具不によつて報土往生・邊地往生を分ち、十八・十九・二十・三願の三心具念佛報土往生者のあることを説く如き、そこに如何に善導の疏に直接することによつて信心中心の追究によつて法然の念佛義を解明してゆこうとする傾向に、當時あつたかに注意せしめられるのである。

かような「信」追究が第十八願念佛一行往生の意義を明にし、念佛・諸行實踐の内容を解明し、更に第十八願に關係する第十九・二十願等の關係意義をも明確にし、依つて以て、法然によつて正依と決定された大・觀・小三經の法義を組織的に明にし、法然主唱の淨土門の教義を完成すると云う傾向に於て位置づけられることは云うまでもなからう。

然もなお、視野を展開するならば、法然滅後の法然讃仰者なる眞言の靜遍の如きが健保六年に「續選擇文義要鈔」を著して、法然の選擇本願念佛義を密教的に顯揚するのに注目せしめられるのであるが、師がなお健保三年(1215)にその密教教學理解を體系的に示す「秒宗文義要」五卷を著し「果」

「理」「教」「行」「心」の組織を以て密教關係諸文類を類聚しその理解を體系的に明にされる如き著を出されていることにも注意せしめられるのである。それは秘密事相の心體驗に重點をおき書かれたものと了解されるのであるが、その文類聚の形式によつてその教學を體系的に示されることが如何にも親鸞の「教行信證」に先驅する如き形式のものであり、そのようなものが當時既に出される一般的傾向にあつたことと、更にそれは當時の中國宋代の「樂邦文類」(A. D. 1200年刊行)等の傾向に關連し、そこには親鸞のよく用いる元照(1116)の「觀經疏」「阿彌陀經疏」又は遵式(1033)の「往生淨土決疑行願二門」「西方略傳序」等に示される如き諸傾向にまでもつながつてゆくものかとも思惟されてくる意味に於て、その邊一般的に廣く當時の佛教著作の傾向が注目されてくるのである。

1 親鸞の「選擇集」への注意は「行卷」引證文・「正信偈」、「化卷」末後序、「銘文」及び「源空和讃」に顧みれば推測されるが、選擇本類の稱名念佛と云うことと共にその三心章の信に向けられていることが注目されるであらう。

2 拙著「日本淨土教の研究」第二篇以下、拙論「教行信證成立期の法然教團の動行」(眞宗學三號) 參照。

五 成立過程の推測

以上のような諸考慮よりして、最後に、「教行信證」の成立過程を親鸞について考えてみるに、次のような経過が推測されてくる。勿論それは極めて試論的な憶測に墮するとも考えられる點が多いのではあるが。

先ず第一に、法然門下時代以後三十五才（1207）流罪より四十才過ぎに亘り念佛一行の實踐に當つての信追究が深められ始めていることを推測したのである。それは惠信文書に示される四十二才頃の三部經千部讀誦廢止の記事等——「教行信證」の後序「棄^ニ雜行^ニ、分歸^ニ三本願^ニ」等参考——によるのであるが、そこには後に「教行信證」に確立されてくる眞門法義簡別の内的な端緒を示されているかとも推測が運ばれる。この頃より以降所謂現存の「觀經彌陀經集註」の如きものが寫されたのであろうか。そこには、その四十五才（1217）なる健保五年に仁和寺かと推測される或貴所より眞言の靜遍が見出したと云う「般舟讚」を善導の諸著（善導諸著はA.D. 1213よりA.D. 1231年頃に亘り幸西門弟出版、三部經は1214に出版するが）の中では特に出さず、又「樂邦文類」（1200年刊行）を朱書し、元照の「小經疏」文を出し、「觀經疏」の三心釋文等を詳引することが注意されるが、後の「教行信證」の材料蒐集の一端に寄與したかとも推測される。

かような経過の中に次に第二にその四十五才頃（愚禿鈔に引かれる般舟讚の發見等に注意するものであるが）以降、現行、

「愚禿鈔」上下二卷に示される如き内容の原始形態が漸次成立せしめられてきたかと推察される。法然教義との關係に於て見出すと、その上卷には大體上述の如く「選擇集」を承けて教行證（信も含むが）の法義を明し、下卷に至るや、かの三心章の如きを承け所謂善導の「觀經疏」三心釋による「信」追究によつての要眞弘三門法義の鮮明化よりする教行證の法義の積極的な解明への動向が注目されてくる。「愚禿鈔」は大體奥書によれば可なり後の製作の如くであるが、奥書よりして上下兩卷同一年月日づけの書となつて（常樂臺存覺本參、高田顯智本には下卷奥書なし）おる如き、それがその製作の年月なるや疑われるのみならず、内容的に見て、要弘相對中心の網格に立ち眞門を僅に出してくると云つて形態を採るもので、その邊、特にその原始形態とも推測されるものは、「教行信證」（要眞弘三門相對の網格成立への一過渡期を示す一模型であるかとも思惟されるので、上述の如く推測したのであるが、そこに示される信追究の理解の仕方が、より始源的には、現存の法然の法語なる「三部經大意」（金澤文庫藏、高田專修寺親鸞眞蹟藏）の如きに關係深く溯つて注意され、更に、かような信追究による念佛義の解明の傾向が、時期を同じくしては、上に言及したように、當時の製作と見られる隆寛の「具三心義」（A.D. 1211作）・「極樂淨土宗義」（A.D. 1220作）・聖覺の「唯信鈔」（A.D. 1221作）・幸西の「玄義分抄」

(A. D. 1218)、『證空の「觀三義」(A. D. 1221—1224作)等』に亘る全般的な諸傾向と軌を一にすることに於て極めて關係深く見出されることを注意しておきたい。

かようにして第三に位置せしめられてくるのが、その五十二才(1224元仁元年)頃以降になるかと思われる教行證文類の網格を中心とする諸經論釋文の「教」「行」(信を含む)、「證」「眞佛」「化身土」(信を含む)に分つ三經三願三門體系分類の極めて原始的な「教行信證」成立の第一歩であるかと推測されるのである。法然の教行證より親鸞の教行信證への展開過程上に於て、然も上の第一、二の立場を承けての所謂「教行信證」成立への第一歩をかくみることが穩當を缺くものであろうか。追究される「信」の内容は「行」の内容を解明するものとして、特に最初は「行」に附して——勿論それは眞假に亘るが——組織化されていつたのでなからうか。現行坂東本にみる如く最後まで「教行證」の總題をもち、又坂東本・文明本等の行卷の尾題に「教行證文類」と題する痕跡を残す如き、その邊の消息を物語るものと思われるが如何であらうか。(以上第三の(a))。

然るに、かような「教行證文類」網格の原始的な分類は、——それは現行の「淨土文類聚鈔」の内容の如きとの關係より溯つて推測されるのであるが——その後漸次、その各分類の私釋の擴充、「行」に附された「信」(眞假に亘るが)内容

——三心一心問答部の如き内容——の充實を計られるに至り、寛喜二年(1236)五十八才頃以降の「唯信鈔」(十七・十八願の關係三心釋等注意)の書寫、文暦二年(1235)六十三才書寫唯信鈔の反對面に見られる「五會法事讚」「涅槃經」要文の抄出書寫等(高田專修寺藏)は相待つて、經論釋文の補充、行信關係内容の整備をなすに至らしめ、その六十才前後の頃までに、若し略抄するならば現行「淨土文類聚鈔」の原始型とでも見做され得る如き「教行證文類」網格のものを成立せしめられるに至つたのでなからうか(以上第三の(b))。淨土文類聚鈔」は上述の「愚禿鈔」と同様建長七年八十三才の書寫であるが、その内容の文章用語等は全般的に現行坂東本の如きものとは以前の作であると見るが穩當でなからうかと推測され、建長七年書寫頃の多少の補筆等があるかも知れないが、その原始型は大體現行坂東本以前と考えたいのである。然して、なお當時淨土教界一般としては嘉祿の大迫害後で、肥後にあつた辨長が「末代念佛授手印」(A. D. 1223)、『徹選擇本願念佛集』(A. D. 1237)等を著して、當時京都にあつた源智の「選擇要決」(A. D. 1235—1238頃)の如きと呼應して異義多きを歎いて多念專修を主張し、京都にて當時「觀經疏他筆鈔」(—A. D. 1235)等を講じつゝあつた證空の他力念佛義や信中心の一念義系の主張に對し、漸時その勢力を伸長しようとしており、長西(—1256)等又漸次諸行本願義的な主張を

強調してくる如き状況下にあつたことが注意される。然も亦更にこの頃前後親鸞の關東よりの歸洛等の問題も拘つて考えられてくるのであるが。

いづれにせよ、かようにして最後、第四に、六十才過よりその七十才頃までに至る間に、先ず最初頃には上の「教行信證文類」への諸經論釋文の補充改訂整理——現行坂東本の斷片部等参照——「信」「化」兩下相應じての三心一心一異問答部等の整備より始まり、その後行卷の六字釋より一乘海釋等の充實（以下本誌二卷二號小川教授研究参照）等が漸次なされてゆき（以上現行坂東本八行書部の大部分の成立を意味する）、その後期には「信」下の大信海釋より、菩提心釋直佛弟子釋等の大補充があつて（現行坂東本の宿紙等を用いる八行書新形文字使用の部分への書變え補充）「信卷」の獨立となり、それは七十才頃までに亘つての「教卷」・「行」・「信」兩卷初部の整備（現行坂東本七行書部分の淨書整備）「信卷」別序、總序の完成となり、寛元五年二月、その七十五才の年に尊蓮が書寫する頃までには大體現行坂東本の原型を形成するに至り、所謂「教行信證」の成立となつたと推察されるのである。蓋し、現行坂東本が、それ自體の示す内容形式のみならず、更に高田本・西本願寺本・存覺延書本・常樂臺存覺寫本・文明本等の諸古寫本に比較検討される場合、その七十五才頃以後なお改訂頭註淨書等が加えられつゝあつて、なおより完成を期待

されていたものなることは容易に推測し得るであらう。

かようにして、要するに「教行信證」の成立は、「信」の追究を終始に亘る基本的な立場とする「行」の實踐的意義の究明、「信」體驗追究による「行」を中心とする「教行信證」の意義の解明と云う展開の進展に於て、「教行信證文類」より「教行信證文類」への成立を見るに至つたと推考されるのである。従つて、現行坂東本以下に見出される如き「信卷」の完成獨立は可なり最後期であると推測されるのであつて、かような成立過程をもつ故、最後まで「教行信證」の三法立題で以てその總題とし、然もその内容は「教行信證」の四法構成を以てされるに至つたものと思惟されるのである。かような意味よりして「信卷」別撰等の課題はその解明の爲可なり複雑な究明の内容交渉を持たしめられなくてはその解明の十全を期しがたいのではないかと考えるものであるが、如何であらうか。

以上極めて杜撰な然も憶測的な敘述に終始したが、一應「教行信證」成立の動向を試論的に一考してみたものに外ならないのである。その邊諸賢の叱正を得んことを期待するものである。

1 坂東本教行信證の信卷（現行信卷本末尾引用）引用の元照「小經疏」四文は大體「觀經彌陀經集註」の小經文末尾に記する所より引きしものと、その引用形態より特に推測される。

2 村上氏「改訂愚禿抄講義」、安井氏論文（大谷學報十二卷一號）、土山氏論文（同上十四卷三號）、梅原氏論文（眞宗研究九、十號）、禿氏の「行信の體系的的研究」（p. 125）等参照。

3 觀經疏散善義の三心觀を總（自力）、別（他力）二意でもつて理解すること等参照。

4 「淨土文類聚抄」と「教行信證」との比較では、前者の信下に「除疑獲得之神方、長生不死之妙術」とあり、後者に「長生不死之神方、淨淨厭穢之妙術」とある如きによるも、それは元照の「小經疏」序分に「除疑捨障之神方、長生不死之要術」とあるによると推測され、それは「文類聚抄」を先きの撰述と見るべく考えしめること等参照。桐溪氏論文（眞宗學九）生桑・山口・岩田諸氏論文（高田學報六・八・三五）等参照。

5 (1) 早く時代の書寫とされる「觀小兩經集註」に教授の指摘される新文字を使い觀經本文中に「廻向」と記し、小經本文末尾で「惡」（舊）・「惡」（新）の兩者を同時に使用する如き如何に思惟すべきであらうか。

(2) 教授の指示による親鸞七十歳頃から七十四歳頃に亘る間の筆蹟變化の度合はその期間に比し餘り激しすぎはしないであらうか。今は前後二十箇年以上に亘ると考えたのであるが。

6 行卷（p. 27右）如來會文下の「證」の字の註（坂本七行書の所）、同論註文（同 p. 14—p. 15）の「誓」「命」「稱」の註等（坂本八行書の所）は坂本、西本は頭註なるに、高田本、存覺本、文明本は共に缺く如き、その他化卷眞門下（p. 25左）の禮

教行信證の成立問題（石田）

ハワイ大學の「東西哲學」

Philosophy, East and West, vol. III, 1953.

(A Quarterly Journal of Oriental and Comparative Philosophy)

No.1 Ch'an(Zen) Buddhism in China: Its History and Method (Hu Shib), Zen: A Reply to Hu Shih(D. T. Suzuki), Aesthetics East and West(H. McCarthy), Śāṅkara on the Question: Whose is Avidyā (D.H.H. Ingalls), Chinese Philosophy and the Second Philosophers' Conference(H.G. Creel). **No.2**, On Philosophical Synthesis(A.W. Watts), Systematics and Synthesis (J.K.S. Liat), The Ontology of the Prajñāpāramitā(E. Conze), The Integralism of Śrī Aurobindo(H. Chaudhuri), Chuang-tzu's Theory of Truth(Siao Fang Sun), On Studies of Confucius (Cheuk-Woon Taam), Detachment (N.A. Nikam). **No.3**, On Philosophical Synthesis (S.K. Maitra), On the Dialectical Affinities Between East and West [1] (C.T.K. Chari), Parallels and Contrast in Indian and Western Metaphysics(H. von Glasenapp), A Naturalistic Approach to Śāṅkhyā-Yoga (G.P. Conger), A Bibliography of Chinese Philosophy (Wing-tsit Chan), Can East Meet West? (J.P. McKinney). **No.4**, Śāṅkara's Arguments Against the Buddhists (D.H.H. Ingalls), Thoreau on Attachment, Detachment and Non-Attachment(W.E. Nagley), On the Dialectical Affinities Between East and West [II] (C.T.K. Chari), Chinese Philosophy, A Bibliographical Essay (Wing-tsit Chan), The Metaphysics of Śāṅkara(T.M.P. Mahadevan)

(University of Hawaii Press)

證の「智昇法師」等の註は坂本西本頭註となり（坂本七行書）、高田本、文明本等缺き、現行諸版本位置を誤る如き、又行卷（p. 5左）悲華經下「曇無讖三藏譯」^{トモニツク}が高田本、文明本の示す所で、西本もそれに近いが、坂東（七行書部）には全くかゝる塗點がなき如き彼此考察のこと。